

工藤 静歌（くどう・せいか）

1、プロフィール

弘前中学休学中に歌作を始め、復学後「潮音」に入社。弘前潮音を支え、育成し、さらに「潮音東北」へと大きく展開させる等、「潮音」と共に歩み、県歌壇への功績は大きい。

<生没>

1901(明治 34)年6月 20 日 ~ 1978(昭和 53)年6月 30 日

<代表作>

歌集『城櫻』

<青森との関わり>

東津軽郡三厩村に、網元の長男として生まれる。永年の県歌壇への業績が認められ、県文化賞、県歌人功労賞受賞。

2、作家解説

歌人。明治 34 年三厩村に生まれた。本名は静一。三厩小に入学、卒業。弘前中学校に入学したが、病弱のため休学。この静養中に、歌を作り始めた。青森の短歌結社「樹焰」に参加、号を静歌とする。大正7年復学するが、結局 19 歳の時病気で退学する。

大正8年弘前出身の先輩佐野翠坡の紹介で、太田水穂の「潮音」に入社。一方地元では、仲間らと「潮音」の弘前支社とも言える「流転」を、翌年にはこの後身である「あすなろ」を創刊。間もなく淡谷悠蔵らの「黎明」に合流してゆく。

大正 10 年夏北海道の途次にある太田水穂、四賀光子を青森で迎え、さらに弘前に立ち寄ってもらい、弘前歌会を催した。11 年三厩小学校で代用教員、同年 10 月特別社友となる。同月全国山水行脚の大町桂月が、小笠原松次郎と一緒に竜飛崎探勝に来村、静歌宅に一週間滞在する。

12年の春上京、大震災に遭い帰郷。13年利尻島の父の漁場に赴き、漁期終了後上京。さらに京都の運送店で勤務。14年父の漁場失敗のために弘前に帰り、弘前新聞社に入社。多忙に紛れて歌のない年が続く。

しかし、昭和9年1月松木静泉の急逝により、静歌は弘前新聞にその追悼号を2回特集する。弘前中学校勤務の森山謙一郎宅で歌会が開かれ、弘前潮音が開花した。その中核として作歌活動を展開。

昭和16年「潮音」同人、17年弘前新聞社廃刊。東奥日報社に合併。7月弘前市会議員に当選。21年「潮音」幹部同人となる。22年歌誌「青雲」を発行する。一方、県下短歌大会選者も務める。42年歌集『城櫻』を潮音社より刊行。43年『弘前潮音歌集』を刊行。8月「潮音東北」を発行。第1～3回潮音東北大会の大会長となる。

51年6月第1回県歌人功労賞受賞。同年11月第18回県文化賞を受け、永年の県歌壇への業績が認められる。53年6月30日逝去。享年77歳。

3、資料紹介

○『歌集 城櫻』

図書

1967(昭和42)年7月19日

185mm×132mm

昭和42年7月19日発行。発行所は潮音社である。序歌は太田水穂1首、四賀光子1首。「銅像出陣」「古城と花と」「海峡」と3つの章に分かれる。大正9年から昭和42年までの、自選の短歌477首が収められている。著者のあとがきがある。